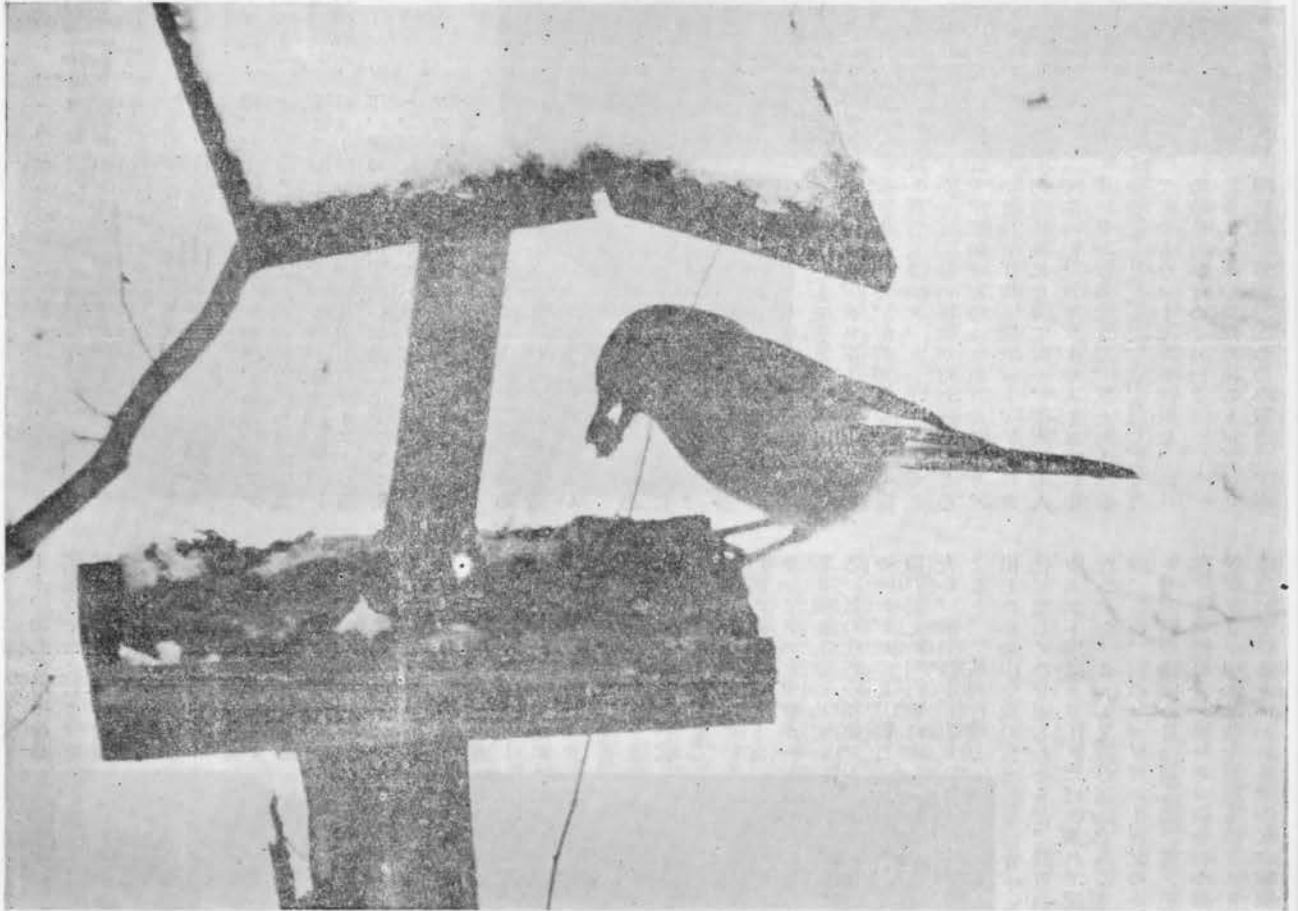


山と博物館

第11巻 第1号 1966年1月25日 大町山岳博物館



山岳博物館の発展性について

矢口 亨

山岳という名のついた博物館が、大なり小なりにせよ、こゝ信濃の奥地、大町市に蔽として存在することは偉大なる貴重な事実であると共に、これは日本の驚異でもありうる。斯界に於ては広く県、文部省の等しく認めている所であつて、いわば、日本の存在であるといつても今日に於ては過言ではないと思ふ。

顧みればその発生、創設は青年有志の創意によるときいているが、すばらしい着眼であり着想であつたと思う。青年の夢を実現した大町の勇氣と知性を深くかいたものである。世人、或は山岳博物館を大町に過ぎたるもの一つであるといふ。この表現は極めて意味深長である。即ち一部の発言は大町の勇氣と知性をほめたたえる立場である。この文化的価値を大いに認めようとする立場である。一部の発言はこれと全く反対にこの価値は認めていながらも、大町自体の財政規模からみて、これを身分不相応とするもの立場である。これを止揚して今日迄いばらの道をかきわけながら堅実な地歩をきつきあげつつ努力してきた業績はその立場を異にするも称讃するにやぶさかではあるまい。

「山博」の位置は俗塵をさつて山の雲間の中にあることは望ましい条件であるがこれがかえつて一般市民との親近感をうすくし距離感を生むに至つたものと思ふ。これが原因となり大衆性をうすくし、その利用価値を低くしたとも言えよう。

然しこれは観光的価値もさることながら市民のものとするのが肝要である。それにはとりあえず動物園の移転実行である。それと併行して、館内容の整備充実が肝要である。観光行政として扇沢分館の計画も発展性あり、実現性も望まれることではあるが、本質的には矢張り教育行政の一環についての認識を忘却することは危険である。願わくは大町市の自主的見識や独自のな方法に於てまず、その充実発展を期するものである。

(前大町市教育長)

アメリカの極地研究とその周辺

【3】

丸山晃

先に述べたようにARLは北極スローブに二十一のフィールド・ステーションをかまえている。チヌクチャイ海からビニョフオート海に至る北極海岸とブルックス山脈中の要所にばらまかれていた。ホープ岬、リズバートン岬、トンブソン岬など主要岬、ブチヌ、ウミアトなど大河畔、テシヌクブク湖、ノラック

トンブソン岬のフィールド・ステーション



湖、ビーターズ湖など大湖畔、あるいはアナクトブク・パスのように峠に設けられていた。私たちはこれらステーション上を飛んだ。パロー岬からブルックス山中のウミアトへ南下、ブルックス山脈沿いに西にトンブソン岬へ、更に海岸沿いにパロー岬へひきかえし、アラスカ東端のビーターズ湖へ。アラスカの北極圏内を縦横に飛んだことになる。

広漠たる北極スローブに孤立してちっぽけなステーションが偉大なる建造物にみえたのは文明がへだて、いる距離のせいだろうか。

ウミアトはコルビール河中流にある三方二百〜三百米の山に囲まれた高原である。背丈をうめるヤナギ。カバが川沿いに生え、ツンドラの景観はこゝでは一変する。ヤナギラン (*Epilobium angustifolium*) やノボリフジ (*Lupinus nootkatensis*) の花が咲き、カリブーヤムスのフンが散らばる、蚊群がワンワンの温い地方であった。

かつて石油の採掘が行われたところで、20個ほどのカマボコ舎があり、いまはローカル線ウイン、アラスカの寄港地になっており、住人は七人であった。カリブーやムースの群を度々見かけるそうだ。私たちも出会った。ライチョウにもお目にかかる。ここでもウイーゼルを使用し、カバの疎林を駆けめぐった。

ホープ岬の東南にあるトンブソン岬には、車輛、二つの小飛行場、ポ

ート、70人分の生活必需品をそなえたキャンプがある。以前合衆国原子力委員会が設立したもので、今はARLに移管されている。キャンプはチヌクチャイ海に面する高台にあり後方はなだらかな斜面に続く二百〜三百米の山がある。南方海岸線続きに遠くクルゼンスターン岬を望む。

八月十五日、西の風、雨。岬は霧に包まれ見えない。午前中ウイーゼルでクリーク上流に出かける。ヒロハヤナギラン (*Epilobium latifolium*)、トリカブト、アサクキ (*Alinum schoenoprasum*) などの花が咲く。

白馬のお花畑のようだ。チョウノスケソウが一面山肌をしきこめてい。貝の化石を採集。キャンプに帰る。終日雨。迎えの飛行機は来ない。後日所長の話によると、二機飛行機を出したが途中気流の変化が激しくひき返したそうだ。終日ねむる。

ウミアトではクリークにはぐまれて遠出できなかつた。こゝも又陸の孤島である。一日に四、五回、南のコツビニョと北のホープ岬を飛ぶ飛行機は今日を通らぬ。霧と突風と高波。発電機の音とカマボコ舎を打つ雨の音。トンブソン岬には四十万羽ものツノメドリが棲息しているといわれる。海面に双眼鏡を向



構築された衣食生活のリス

けると十数羽、三十羽の群が幾つも幾つも行きかかうのが見られた。栽培するため根こそぎ植物を採集しているカナダの植物学者や、くりコブターで地磁気観測する二人組が雨のためキャンプメになっている。ここ二、三日のうち斜面の秋色が一段と濃くなった。このキャンプは八月末には閉鎖される。来春に備

え、新装のモダンな四棟もほ、完成していた。ピータース湖畔には七棟からなるステーションがある。数人の研究者が一年間住むに足る装備と食料が常備してあるようだ。車輛、モーターボートの設備もある。

ピータース湖はブルックス山中の谷に相当深く入り込んだ所であり、近くに標高四千米のチェンバレン山がある。湖畔のツンドラはヒツジの足跡でうまり、ぎっしり踏み固められていた。一九六一年開設以来このステーションの訪問者は百余名。一九六五年になってからは私が八番目であった。あるスウェーデンの陸水学者は一年間ピータース湖に滞在したという。

秋も深まり私たちは極北の夜を迎えた。天頂のマグネティック・ホールを中心にリ動く霧のように輝くオーロラを眺めながらピータース湖産最大七七cmもあるマスを味わった。

私たちの北極スロープの踏査はここで終る。ARLは二一のフィールドステーションの外、四つの浮水ステーションを設立、管理した。アイリス1、3、T13である。一九三七年五月、四人のロシア人グループが北極海の真中の浮水に着陸、九ヶ月間にわたり浮水上で観測を続けた。北極第一号と呼ばれるこのステーションはグリーンランド海のスタリニー水に吸収されかけているところを砕氷船によって撤収された。

一九五一年アラスカ空軍がパーロ岬の北百六十呎の浮水上に八人のグループを配置した。三週間後、嵐の襲撃を受け浮水は裂かれ、浮水がぶつかりあってキャンブは水にかみ砕かれ海に没した。ARLの浮水ステーション建設にはこうした背景があった。一九六〇年九月、アイリス1は砕氷船によってパンクス島近くの浮水上



ウミアトで採集する小林義雄博士

に設けられ一九六一年三月まで営まれ、放棄された。アイリス2とT13は水島上の主要な設備で常時使用されている。前者はARLによって一九六一年五月に建設され、一年間に一千㎞程移動するそうだ。後者は元来アメリカ空軍によって長年使用されていたが一九六〇年二月以来ARLの管理下におかれ北極海の氷水中を循環し、或いはパーロ岬の近くの海岸の浅瀬に乗り上げるといわれる。アイリス3は一時的なステーションで、必要に応じて一ヶ月間あるいは数ヶ月使用される。パーロ岬の北二五〇呎に三月設けられ、三月後の雪溶け期の到来とともに放棄される。北極海を含め周極地域の高等生物の分類、

分布、生態やカナダ北極圏の微生物については既に詳しい報告がある。戦後とりかかったARLが今努力を傾けているのは恒久的なフィールド・ステーションの建設であった。これ

郷土の地質

長野県教育センター専門主事

平 林 照 雄

〔その4〕

十、東山は海だつた
松本盆地や四か城盆地の東山は、中山山地と小谷山地と呼ばれ、一〇〇〇米内外の低山地の地形である。三〇〇〇米級の西山とは実に対照的である。西山がけわしい山地である理由は前に述べた。今度は東山の出来かたを考えてみよう。

山の出来かたを大別すると、火山、断層、侵食、褶曲などがある。このうちで、最も大規模な褶曲を作る場合は、地球のしわといわれる褶曲作用である。褶曲山地を作るためには何キロメートルもの厚い地層があつて、それが地殻運動の際の圧力でおしまげられなければならない。それでは厚い地層はどのような山に出来るだろうか。日本アルプスや関東山地がすでに陸地になつてゐる頃、フォッサ・マグナの地域は浅い海であつた。すなわち東山の部分は海峽状の海域で、その時代は第三紀中新世で、今から三〇〇万年も前のことである。この海へ日本アルプス側の土砂や礫が盛んに運び込まれた。フォッサ・マグナの部分は堆積物が厚くなると海底が沈降する地向斜性であつたらしく、海の深さの何倍もの地層を作ることが出来た。世界的に有名な大山脈、たとえば、ヒマラヤ、アルプス、ロッキーズ、アンデスなどは、地向斜の海に堆積した厚い地層が褶曲して出来たものである。

東山の地層の中に入っている礫の種類や大きさおよび量などを調べると、堆積当時の運搬方向や運搬力の強弱または古地理などが推定出来る。礫の種類は古生層の粘板岩、硬砂岩、チャートや花崗岩類で、初めの頃は赤石山地や木曾方面の南方から供給され、後になると西側の北アルプスのものが主体となる。等三紀の鮮新世末には特に多量の粗大な礫が堆積したことがわかつた。フォッサ・マグナの北部に堆積している第三紀層は、南の方の古いものから、北の方の新しいものに向つて守屋層、内村層、別所層、青木層、小川層、桐層などと古くから分類されている。

東山を歩いてみると、掘割りや崖の露頭で西傾斜又は東傾斜の地層があり、時には背斜構造や向斜構造の褶曲の様子を観察される。また、堆積当時海にすんでいた古生物が化石として入つており、採集することが出来る。美麻村では貝や鯨が出るし、南小谷や陸郷でも沢山の貝やウニがある。広津の中ノ貝にはカキ貝の層があり、生坂村ではカレイやニシンの仲間や鱈が出る。広津ではヒトデの化石もとれた。

からじっくり暇をおちつけて諸観測に取り組みうとしていた。私たちのように短期間滞在し一わたりまわり歩くにはARLの施設はもつたないかと思つた。(おわり)

東山の地層も上部の新しい部分になると、鮮新世頃から陸成層となる。大町市常光寺の東ではトブ貝の化石を採集したし、生坂村込地南ではタニシやシジミの化石が産出する。また植物化石や石炭層は各所にあり、石炭はかつて稼行されたところもある。

十一、火山ではなかつた大峰山列
池田町東北方の大峰から、大町市東の南鷹狩山・鷹狩山・雲松寺山・青木湖東方の権現山を経て、さらに姫川流域にかけて、南北四

十料に達する山列は、それ／＼の山が火山の形態をしており、昭和の初め大峰火山地区として報告された。大峰の岩石は、ガスのぬけた大小複雑な孔が多く、流理構造を持ち、浮石・花崗岩片・古生層の礫などを捕獲し、暗灰色のドロテクな岩相で、黒雲母を含んでいる。私達はこれに大峰型石英安山岩と命名した。

大峰山列の山々は、前述の第三紀層をぬいて噴出した第四紀の火山で、富士火山列の最北端部と考えられていた。たしかに大峰は常盤の方から見ると溶岩台地の形をしているし鷹狩山も西からみると、ケツ山と俗称されているように鐘状火山の姿をしている。また、頂上部には火山岩である大峰型石英安山岩がある。このように形も岩も火山のものであってみれば火山にするのも無理はないであろう。

長いこと大峰山列付近を調査したところ、火山だというのに基盤をぬいている証拠がないし、西斜面にある岩に東傾斜の流理構造があったりする。結局は、第三紀層が堆積している時に海底火山が噴出し、その時の溶岩や火山灰が地層の一部としてはさみ込まれ、その後の隆起や侵食で、硬い部分が偶然火山のような形になったものと判明した。

このように第三紀以前の古い火山の噴出物は、地層とみなされ、火山としては失格である。犀川東側の聖山、松本市の美ヶ原、三階節で有名な越後の米山、瀬戸内の諸火山も、その後火山から次々と脱落して行った。

十二、山の上にある河原の石ころ

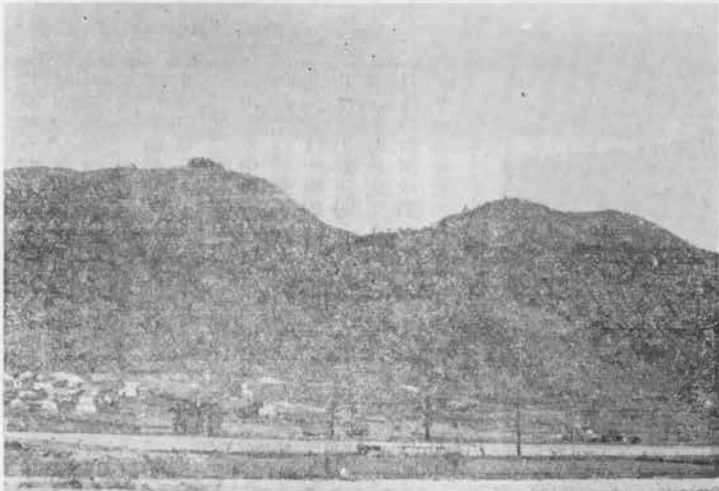
西山のように解析の進んだ山地でも、平坦面が残っていることを前に述べた。まして、東山のような幼年期の山地には平坦面が多く、美ヶ原の頂上の面はその好例である。大町市の東山の平坦面を大峰面群と呼んでいる。八坂村唐花見・相川・三原や大町市居谷里、大町スキー場

などは平坦面の一部に出来た湿地や泥炭地である。

この大峰面群上には、西山からかつて運搬された河原の巨礫がのっている。大きなものは三米以上もある。大町市常光寺の清音滝の沢では、頂上から転落してきた花崗岩の大塊がある。このような巨礫を山砂利とか大峰礫層と呼んでいる。何故山の上に河の運んだ巨礫があるのだろうか。

西山と東山との境界部の構造的に弱い部分で、落ち込んで松本盆地や四ヶ城盆地が出来ている。盆地の原形は第四紀洪積世中頃に来、今から数十年前の比較的新しい頃である。盆地が形成される前は、西山と東山は地形的に連続しており、西から東へ河川は流下していた。この時運ばれた扇状地的の砂礫層

大町市東方の偽火山地形



が、盆地の落ち込みによって間を断たれ、今は東山の頂上部に転位したと考えられる。この際巨礫が沢山分布していた部分は松本盆地となり、新しい堆積物が巨礫層をおよぼしてしまった。山砂利の礫は西山を作っている花崗岩や石英斑岩で、第三紀層中にある礫岩が礫と同じ岩質のものであるが、一般に大きさが巨大である。これは、当時の運搬力が大きかったことを示している。山砂利の存在は全国各地で報告されており、時代や成因は種々である。

傷ついたキレンジャク

長 沢 修 一 介

「午前八時三十分、レンジャクの大群八十〜一〇〇羽隣家の柿の木に飛来、例年より一ヶ月以上も早い、紅か黄か、見分けつかず、朝から小雪降り肌寒し」
 以上は昨年十二月一日の私の野帳の走り書きである。毎年一月の中旬頃になって大群で到来するレンジャクが、今冬は一ヶ月以上も早くやって来た。レンジャクが里に姿を見せるのは雪の到来と大いに関係がありそうで、今年雪の量も例年になく多いので、彼等のやって来るのが早かったのかも知れない。

先日の日曜日、すっかり白い世界になってしまった森の中を鳥たちの姿を探して一日歩いてみた。今年例年多く見かける、ツグミやカシラダカの姿が少なく、レンジャクは比較的多くその姿をみかけ、又声も耳にした。昨年はヒレンジャクの方が多かったが、今年はやゝ大きいキレンジャクの方が姿が多いように見受けられた。

カラ類の小さな声に引かれて、小松林の中をヒザまで雪をかき分けて、あえぎあえぎ歩いてみると、突然足元の藪の中からバタバタと一羽の鳥が走り出した。五米位向うへ行ったら止まった姿をみると、片翼を傷つきたらりと下げた、キレンジャクであった。近寄

って傷の程度を見ようとして私が歩き出すと片羽を引きづりながらバタバタと逃げてしまふ私が立止まると、こちらを警戒しながらピョコ、ピョコと歩きながら遠くへ行ってしまう片羽が中途から折れてダラリと下って行ってしまうが、恐らく心ないハンターにでも撃たれたのだらう。大群で行動し、特に人家の附近まで良く飛来するので心ないハンターにねらわれ易いのである。一冬に一度はこんな傷ついた小鳥を見るのであるが、狩猟法で決って撃つて良い鳥と撃つていけない鳥を講習会まで聞いて教えているのに何故数少ない小鳥達を傷つけなければならぬのかと思う。傷ついたキレンジャクは飛ぶことが全く出来ないが、元気がよくピョコピョコと歩きながら、やがて、雪のため折り曲げられ松の木の小枝をつたってよしのぼり繁みに姿をかくした。



表紙説明

餌台にきたカケス(山博裏にて) 撮影 千葉 彬 司

山と博物館 第11巻第1号
 一九六六年一月二十五日発行
 発行所 長野県大町市T.E.L.(大町)二二一
 印刷所 大町 山岳博物館
 大町市下仲町
 大糸タイムス印刷部